OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「くび」の「しこり」に御用心
Author(s)	高井, 新一郎
Citation	癌と人. 1997, 24, p. 18-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/23957
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「くび」の「しこり」に御用心

高　井　新一郎*

ここで「くび」(頚部) というのは下顎から鎖骨までのことで，口の中の奥の方のことではない。つまり，頚部は頭と胴体をつなぐ身体の部分全体であり，舌の奥のいわゆる「のど」とはちがう。「くび」の正面にあって男性で目立つものを「のどぼとけ」と呼ぶせいか，時に「くび」という言葉を「のど」と混同しておられる患者さんがあるので，誤解を避けるためにはじめにお断りしておく。

頚部にはもちろん色々な臓器，組織があり，それらを構成する細胞は多種多様である。ところで，すべての細胞は癌化する可能性を持っているから，頚部にも色々な悪性腫瘍が生じ得る。そこで，頚部に発生する悪性腫瘍には，どのようなものがあって，それぞれの特徴的な症状や，早期発見・早期治療の方法，さらに予後はどうかといった事柄について述べることにしたい。

1．「くび」にある臓器

主なものに，甲状腺，上皮小体 (副甲状腺ともいう)，唾液腺，喉頭，気管，食道があり，これらを支持し，保護する骨格 (主なものは頚椎) や，軟骨 (主なものは甲状軟骨，気管の軟骨など)，脂肪組織，結合組織がある。さらに重い頚部を支え，自由に動かすための筋肉群があり，それに信号を伝える神経もある。これらに栄養と酸素を供給し，ホルモンなどの産物や老廃物を搬出するための血管系 (動脈，静脈) があり，また，リンパ系も発達している。その上に，能からの命令を頚部以下の各部分に伝え，あるいは，逆に頚部以下の各部分からの情報を脳につたえる神経もあれば，意識しなくても常に働いている心臓や肺，消化管などの活動に重要な自律神経系もすべて頚部を経由してそれぞれの臓器に分布している。これらの構造物は，皮膚によって表面を覆われている。

このような多くの種類の臓器から，頻度の差こそあれ，腫瘍が発生する可能性がある上に，頚部のリンパ節には他の部位にできた癌が転移してくることがある。

2．腫瘤を生じ得る疾患にはどんなものがあるか？

身体のどこかに生じた「腫れ物」あるいは「しこり」のことを腫瘤とよぶ。癌のように細胞増殖のブレーキが効かなくなった時にはもちろん「しこり」ができるが，それ以外の病的状態でも「しこり」はできる。たとえば，炎症がおこって白血球などの細胞がその場所に集まってくれば，その場所は付近の正常部にくらべて硬さが増して，「しこり」として触れるようになる。また，母親の胎内で人間の身体の各臓器ができあがる途中で，一時的にできた構造物がまた消失するといったことはよくあることである。その消え去る運命にある構造物が，何かの異常のために部分的に消え残ると，生後に徐々にそこに何かがかたまって「しこり」ができることもある。

つまり，腫瘍，炎症，および発生異常の三つが「腫瘤」の主な本態である。したがって，「くび」に腫れ物が出来たからといって，必ずしも癌と決まったわけではないが，癌の可能性

* 大阪癌研究会評議員，大阪癌研究会一般学術研究助成選考委員，大阪大学腫瘍外科教授

を考えて対処すべきである。「腫瘍」と「腫瘤」とは，似た言葉であるが意味が大きく違うことを知っておいて頂きたい。

3．「くび」に「しこり」ができた時，どう診断をすすめるか？

まず，1に挙げた数多くの臓器・組織のうち，どの臓器から生じた「しこり」かを考える。それには，各臓器の本来の位置がもちろん大きな参考になる。

次に，2で述べた三種類のうち，どれなのかを考える。発生異常は腫瘤のできる場所が大体きまっているので，割合簡単に鑑別できる。炎症の場合，急性炎症はその局所が赤く腫れ，熱をもって痛むので，これまた診断はそんなに困難ではない。これに対して慢性炎症は痛みも殆どないことが多く，癌との鑑別がむつかしい。

各臓器にできる癌の性質，症状・所見の特徴を知っておかねばならない。

頚部腫瘤全部について述べるのは無理なので，ここでは甲状腺の腫瘤と，リンパ節の腫瘤に話をしぼることにしたい。

4．甲状腺の腫瘤について

甲状腺は前頚部をしめる15-20gくらいの内分泌腺で，ここから分泌される甲状腺ホルモンは全身の細胞の働きを活発にする。

甲状腺のホルモン産生が必要以上に亢進する病気に有名なバセドウ病があり，逆にホルモン産生の低下する病気に橋本病（慢性甲状腺炎）がある。この両者は甲状腺が全体として腫大する。

これに対して，甲状腺の腫瘍（良性または悪性）は前頚部の「しこり」を生じる。甲状腺の腫瘍は，血中甲状腺ホルモン値の異常を来さない。このことは大切で，甲状腺機能に異常のないことから甲状腺癌を否定することは出来ないのである。

甲状腺腫瘍を疑ったならば，診断確定に一番よいのは腫瘤の穿刺吸引細胞診である。これによって良性か悪性かの鑑別だけでなく，慣れた細胞診判定者であれば，腫瘍の組織型まで推定できることが多い。

甲状腺癌には，乳頭癌，濾胞癌（この両者をまとめて分化癌と呼ぶ）があり，これらは若い女性に多いこと，増殖がゆっくりしていること，頚部リンパ節の転移は多いが丹念に郭清してやれば根治が期待できることなど，他臓器の癌とはかなり違った特徴がある。したがって，甲状腺分化癌は遠隔転移の起こる前に見つけてきちんと手術することが重要である。また，たとえ肺転移を起こしても放射性ヨード療法の可能性がある。しかし制癌剤は殆ど効かない。このように甲状腺分化癌は，頚部腫瘤以外の症状が殆どないので，甲状腺疾患に詳しい医師でないとただしい診断・治療がなされない場合がかなり多い。長期にわたって放置された分化癌から，極めて悪性の甲状腺未分化癌に転化すると3～4カ月で死亡する。甲状腺には，このほかに髄様癌があり，髄様癌の約1／3は遺伝性で，副腎褐色細胞腫などを合併する多発性内分泌腺腫瘍症の部分症として現れる。

つまり，甲状腺癌には大多数のおとなしい癌と，少数の極めて悪性の癌，および，これも少数ながら変わったタイプの髄様癌があり，できれば内分泌外科医にかかることが薦められる。

5．頚部リンパ節腫瘤について

頚部リンパ節に腫瘤を生じるのは，炎症性にリンパ節が腫れる場合と，腫瘍性に腫れる場合がある。前者はさらに急性炎症と慢性炎症に分けられ，後者は原発性の悪性腫瘍と転移性悪性腫瘍に分けられる。

急性リンパ節炎は，例えば虫歯や扁桃腺炎から化膿菌が頚部のリンパ節に侵入して生じることが多く，顎下のリンパ節が腫れることが多い。前述したように急性炎症の特徴的症状・所見と，口腔内の所見から診断は容易である。

表　頚部リンパ節腫脹の鑑別診断

	結核性リンパ節炎	悪性リンパ腫	転移性癌
硬さ	硬・軟さまざま	中等度，均一	硬い
形	腺塊形成（凸凹）	球形，多くは多発	不規則
可能性	乏しい	有り	乏しい
その他	胸部X線検査	他部位にも腫脹あり	原発巣の探索

慢性リンパ節炎の代表的なものは結核性の炎症である。これは痛みや局所熱などがなく，腫瘍とまぎらわしいことも多い。

したがって，「くび」の「しこり」がリンパ節の腫れらしいと思ったときには，慢性炎症か腫瘍か？腫瘍とすれば原発性（悪性リンパ腫）か転移性か？を鑑別すればよい。そのためには，「しこり」の硬さなどの表に示したような特徴を参考にして診断をつける。

表を参考にして仮の診断を付け，それを検査で確認するわけである。

腫瘤の穿刺吸引を行い，もし膿汁が得られたならば細菌検査により結核性リンパ節炎が確定する。膿汁が得られなくても，細胞診をすればこの三者の何れであるかがかなり確実になる。より正確な診断（悪性リンパ腫のサブタイプの診断や，転移性癌の原発巣の推定など）には，切開手術で腫瘤の一部を採取するopen biopsyが必要である。

結核性リンパ節炎と診断がつけば抗結核剤の投与で内科的に治療する。悪性リンパ腫ならば，病期を判定した後，放射線治療および制癌剤治療を行う。

転移性癌ということになれば，原発巣がどこであるかを探索する。それには，もちろんリンパの流れの上流を探す。問題のリンパ節腫瘤の位置（頚部でも上の方か，下の方か，一側か，両側か），さらにどこから腫れてどこへ広がっていったかをよく聞き出す。頚部の上方から腫大が始まり下方に広がった場合は，咽頭など耳鼻科領域に原発巣があることが多い。左鎖骨上窩の転移性リンパ節腫大はVirchowの転移として有名で，胃など消化管の癌の転移の可能性が極めて高い。甲状腺原発の癌が頚部リンパ節に転移を起こしやすいことはいうまでもない。原発巣が何れにあるかによって治療法が全然異なってくる。Virchowの転移があれば根治手術は無理であるが，甲状腺分化癌の頚部リンパ節転移は多くの場合に根治術ができる。

根治術が出来るか否かで予後が大きく異なることは言うまでもない。

6．むすび

多くの人は「癌」といえば胃癌・大腸癌などの消化器癌や，乳癌のことを思い浮かべられるだろう。これらの癌が頻度が高くて，それで亡くなられる方が多く，集団検診の対象にもなっているので，一般の関心も高いからである。

しかし，ここに述べたように，頚部にできる癌も少なくない。しかも，多くの場合，痛みを伴わない「頚のしこり」が唯一の初期症状である。その上，頚部にはいろんな種類の腫瘍ができる。放置しているうちに治療の時期を失う例も多いので，油断せずに異常な「しこり」に気づいたら医師に相談していただきたい。